

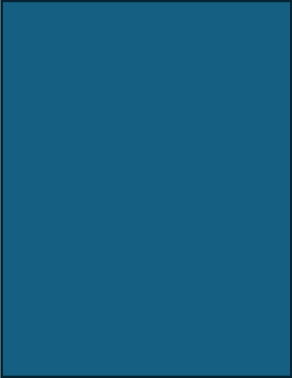
こんなものを読んできた(38)

「蒲生邸事件」宮部みゆき（文春文庫・講談社青い鳥文庫）

校長・鈴木 健

2月が近づいてきました。毎年この季節になると読み返したくなるのが、宮部みゆきの「蒲生邸事件」です。超ざっくりまとめると、現代の若者が2.26事件（※）の最中の東京にタイムトラベルする話です。しかし、この本の中の「現代」は30年以上前の1990年代前半なので、みなさんからするとそれ自体が過去の話でしょう。

大学受験に失敗し浪人になった主人公の孝史は、予備校に入学するため地方都市から東京にやって来ます。



当時は大学が今より少なく高校生は2倍くらいいたので、大学入試は今より厳しく、志望大学に合格できない人が沢山いました。志望大学へ再挑戦するために、高校卒業後も受験勉強を続ける人たちを「浪人」と呼び、勉強を教えてくれる予備校は地方には少なかったため、たくさんの浪人が東京などに出てきていました。

孝史はアパートを借りるまで、東京の平河町（国会議事堂の近く）にある古いホテルに宿泊することになります。そのホテルが火事になり、孝史は逃げ遅れたところを謎の男に助けられますが、火から逃れた先はなんと昭和11（1936）年2月26日、2.26事件当日の東京でした。

謎の男は時間移動できる超能力者で、孝史を現代に戻してくれると約束しましたが、男の能力は一度使うと回復するのに時間がかかります。孝史は男の勤め先である蒲生邸に身を寄せました。ところがその直後、蒲生邸の主人である蒲生憲之陸軍大将が死んでいるのが発見されます。警察を呼びたいところですが、周囲は2.26事件の反乱部隊に封鎖されています。孝史は蒲生邸で女中として働いている少女ふきの助けを借りながら蒲生大将の死の謎解きをすることになります…。

この作品が書かれた1990年代はバブル絶頂から崩壊の直後くらいで、日本中が豊かでした。その豊かな時代に育った若者が、はるかに貧しく不便な1930年代に迷い込み、その中で一生懸命生きている人々と触れ合うことで成長するというのが、この物語のテーマです。しかし今、2020年代の日本では経済や産業の低迷の中、再び格差が広がり生きにくい世の中になっています。もしかすると皆さんには1990年代の孝史より1930年代のふきの方が自分に近い存在に感じられるかもしれません。

作品の中で孝史は、この時代の後に起こる戦争や敗戦後の混乱からふきを助けるために、平和で豊かな自分の時代に連れてこようとはしますが、ふきはそれを拒否し、自分の時代を生き抜くことを選びます。そのまっすぐな生き方にとっても励まされます。これから自分たちの時代を生きていく、みなさんにぜひ読んでほしい作品です。

（※）貧困に苦しむ人々を救うため、天皇中心の政治に改革しようとする軍人グループ（皇道派）が起こした反乱事件。反乱は失敗に終わったが、事件後は軍人の発言力が強まり、民主的な政治は行われなくなった。